



教室日記<こころの天気図>発行・音田輝元

教育心理学は、<共育真理楽>入門

心を知る過程も…科学の視点で!

■石金先生の講義から、山口さんの<もの作り>体験講座へ



●昨年に続いての講義でしたが、今回もとても新鮮な気持ちで学ぶことが

できました。「人のこころなどわかるはずがない」(河合隼雄・心理療法家)が原則。だからこそ、今明らかになっている発達段階での多様な法則を「自分のスキルアップとして学ぶ必要がある」と改めて教えられた講義でした。ありがとうございました。

★心理学とは全くの未知の世界でした。少しだけのぞけて参考になりました。★石金先生の心理学、よくわかりました。発達障害の児童の気持ちが体験できたことがよかったです。(一ロレボより)

●午後からは、<山口隆弘>さんを講師<もの作り>体験講座でした。すでに多様な活動を継続的に実践されている山口さん。準備・段取りなど慣れたものでさすがだなと思いました。7月28日、<法円坂フェスティバル>がますます楽しみです。



●次回は、どなたが講師になっていただけるのでしょうか。楽しみです!

オピニオン

私事で恐縮だが、還暦を迎えた家内が今春、大阪府高齢者大学校に入学した。

以前は老人大学だったが、大阪府の財政事情から5年前にNPO法人として名称も変えて再スタートした。1年間、週1回の授業で、入学金と受講料を合わせて5万円かかる。それでも今年度の受講生は2千人を超えたというからなかなかの人気である。

総務省が発表した人口推計で、65歳以上が初めて3千万人を突破した。人口減と高齢化が加速しているが、アクティブ・シニアが多ければそう悲観することもない。

語学研修や郷土史研究、パソコン、スポーツ・健康など54もある学科から、家内は「笑いの創造科」を選んだ。募集要項には「笑いは、人生の栄養源です。笑いは、人を楽しませるだけでなく、自身自身の心と身体に健康をもたらしてくれます。笑って・笑って、長寿を築きましょう」とある。

座学や觀賞だけでなく、漫才、落語などの実技、台本制作の授業もあり、文化祭では発表の機会も

笑う門には長寿がある

あるそつだ。いかにも大阪らしい、いや大阪でなければこんな講座はできないだろうし、受講生も集まるまい。

大阪は古くから「商都」として知られるが、最近では「笑都」とも呼ばれる。テレビで吉本興業などのお笑い芸人を見ない日はなく、大阪井が氾濫しているのが理由だろうが、実際、日常生活の中に笑いの文化が定着している。



大阪特派員

鹿間孝一

例えば、子供たちの間で人気があるのは、勉強ができたり、スポーツで活躍したりする子よりも、「オモロイ」子である。大阪井でふざけるとかお調子者を意味する「いちびる」は、「あいつ、いちびりやな」といった具合に使われるが、決して非難しているわけではなく、むしろほめ言葉と受けとめられるのだ。

そんな大阪の笑いの文化を、

「日本笑い学会」を創設した井上宏関西大名書教授は、ヨコ型社会で発展してきたから、と言う。

東京はタテ型社会である。江戸時代にさかのぼると、上下関係の強い身分制度の中で、侍は縦軸の立身出世を一番の大事とした。現代でもそうした傾向に変わりはないだろう。対して、大阪の商人は商売相手との関係、言い換えれば横へ横へと商売を広げることが考

えた。そこで笑いがさまざまな効用を発揮した。
「笑う門には福来る」と言うように、笑いがあるところ、人が集まり、にぎわいがある。すなわち笑いには「誘引作用」がある。次いで、笑い合うと緊張が解け、互いの間にあった距離が縮まる。人間関係の潤滑油としての笑いの「親和作用」である。
一方で、物事がうまくいかない

時、落ち込んでいる時に、あえて大いに笑ってみる。すると身体の中で化学反応が起きて、ポジティブにリフレッシュできる。井上さんは、笑いの「浄化作用」と言う。さらに笑いには柔軟性を失った常識や固定観念からの「解放作用」もある。

以上、井上さんの「大阪の文化と笑い」（関西大学出版部）から引いた。やや大阪びいきの分析だが、待はしかめっ面をしてめったに笑いを見せない。むしろ笑いを遠ざけた。だから「武士の商法」がみな失敗に終わったと考えると、井上さんの説も納得できる。

「日本笑い学会」の設立総会は平成6（1994）年7月9日に開催された。笑いなのに7（泣）9（く）の日を避ぶとは、井上さんもけっこう「いちびり」だ。
家内は大阪人ではないが、好奇心が強く、芸事が好きだから、張り切って高齢者大学に通っている。いずれ家で「お笑いを一席」と披露するのだらう。はたして笑えるかどうか…。
（しかま こういち）